

## ガラパゴス諸島—進化と生態の実験室

長崎大学名誉教授 伊藤秀三

ガラパゴス諸島は太平洋のかなたにある。1835年チャールズ・ダーウィンのビーグル号探検以来、人はこの群島にニックネームを与えた。「世界の果て」、「太平洋のノアの箱船」、「生きものたちの王国」、「進化論のふるさと」など。いずれも的を得ている。群島は1959にエクアドル国の国立公園となった。世界注視のうちに、1964年には自然保護を目指してNGOダーウィン研究所が世界からの寄金によって設立され、エクアドル政府は1968年に国立公園管理事務所を開設した。両機関による自然保護の実行は、世界自然遺産(1978)、生物圏保護区(1984)、海洋保護区(1986,1998)の指定という実を結んだ。

なぜガラパゴスは世界の注目を浴びるのか。それは、1000キロの海を越えて群島にたどり着き、ここで進化を遂げた特異な固有生物が多くいるからである。いまでも、19世紀にダーウィンが見たであろう自然と生物を、そのままの姿で見ることが出来る。

固有種率要約表					陸産の主な固有動植物			
		種数	固有種数	固有種率(%)				
陸産生物	種子植物	436	223	51	哺乳類	コメネズミ 7種	オットセイ	
	隠花植物	583	41	7	鳥類(海鳥)	アホウドリ	ペンギン	
	陸産脊椎動物	97	58	60	(陸鳥)	ダーウィンフィンチ 13種	コバネウ	
	陸産貝類	83	80	96		マネシツグミ 4種	ハト	
	陸産節足動物	2059	1071	52	爬虫類	ゾウガメ 12亜種	ヘビ 4種	
海産生物	海藻類	333	116	35		溶岩トカゲ 7種	ヤモリ 6種	
	海産脊椎動物	472	43	9		陸イグアナ 2種	海イグアナ	
	海産甲殻類	377	137	36	種子植物	スカレシア 15種	マクラエア	
	海産軟体動物	652	148	23	(固有属)	レコカルプス 3種		
	棘皮動物	126	16	13		ダーウィニオタムヌス 3種	2変種	
						溶岩サボテン	柱サボテン 1種	2変種

目前に繰り広げられる動植物の生態は、人間の影響を受けない自然のままの生態を見せてくれる。スカレシア15種は固有の植物で、乾燥地に生える低木12種と、高所の湿潤地に生える高木3種がある。最大の高木種は幹直径25センチ樹高12メートルに達し、純林を形作る。それはある条件のもと、一斉に芽生え、揃って成長し、一斉に枯れ果てるといった特異な世代交代を行う。それは樹木のない孤島の上で草本植物が遂げた進化の結末である。動物界で特異なのはコバネウである。強力な肉食動物がない生態系の中で、羽を退化させ飛ぶことをやめたばかりか、「多夫一妻制」によって種族維持に成功した鳥である。ほかにも特異な生態と進化を見せる動植物は数多い。だからこそ、ガラパゴスは「進化と生態の実験室」として世界の注目を集めているのである。

大型中型の哺乳類のうち、ヒトだけは筏を作り船を作って海を渡る手段を手に入れた。ガラパゴスにヒトが入り込み、かつては意図的にヤギやブタ、グアバやシンチョナを持ち込み、それらを放置して山野に帰化させた。いっぽう最近のガラパゴスは、目前に野生生物が見られる地としても注目を集めている。探訪者は世界中からやってくる。人や貨物の移動にまぎれて、最近ではヤモリやハチ、キイチゴやカエルまで帰化してしまった。それらは自然生態系のなかに侵入し、生態系を変容させ始めている。もはやガラパゴスは「世界の果て」ではない。「世界の注視」の「生態と進化の実験室」であり、「エコツアーリズム先進地」である。しかも「人と帰化生物も乗せた箱船」となってしまった。

ダーウィン研究所と国立公園事務所は、連携し協力して自然保護を進めてきた。しかしその努力を上回る勢いで帰化動植物は広まるかも知れない。この趨勢を変えるべく、1998年には、陸と海の生物多様性保全と自然保護をかかげた「ガラパゴス特別法」が制定された。固有動植物の保護と同時に、帰化動植物を早くコントロールし駆除しなければ、また海の自然の実態を解明して資源の保護管理を徹底しなければ、ガラパゴスは「生態系崩壊の実験室」となるかも知れない。